



東国分中だより

令和8年1月13日

NO.15

学校 HP

学校教育目標 「夢や希望を抱き、生きる力を持った生徒の育成」
～知・徳・体の調和のとれた生徒～

<https://ichikawa-school.ed.jp/ekokubun-chu/>

東国分爽風学園
市川市立東国分中学校
校長 植木 昭貴



みんなでいじめを許さない学校へ



生徒会主催のブルーリボン運動が12月に行われました。「いじめのない学校は、自分たちで創る」というスローガンのもと、今回多くの生徒が賛同してくれました。また、2学期の終わりに開催された「いじめ防止全校ワークショップ」では、クラスや学年の垣根を超えた様々な行動宣言が出されました。

昨年の10月、文部科学省より「令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の速報が発表されました。その中で全国における「いじめ」の認知件数は約76万9千件と過去最多を更新しています。この結果について文部科学省は「小さいいじめも見逃さず積極的に認知して対応していることに対して肯定的に捉えている。」というコメントを出していますが、その一方でいじめが様々なところで発生し、本当に多くの人たちが苦痛を感じていることも事実です。

いじめは、理由の有無にかかわらずやってはいけない行為です。「いじめられる側にも問題があるから」という理由は成り立ちません。万が一理由があったとしても、人を傷つけることは正しい行為とはいえません。

もし、皆さんの周囲でいじめが起こったら、おそらく多くの人は被害者に寄り添ったり助けたりするべきと理解していると思いますが、様々な人間関係がある中で、「実際のところそのようにすることは難しい」と感じてしまう人もいるでしょう。しかし、いじめによって傷ついている人が放置されているような環境の中で、皆さんは自分らしくのびのびと過ごすことができるでしょうか？

優しい生徒が多いといわれる本校でも、毎年いじめが認知されています。認知に至った経緯は様々ですが、いじめられている本人が直接申し立てることはとても勇気のいることであり、もしかしたら誰にも言えず、認知されることがないまま苦痛を抱え込んでしまっている人もいるかもしれません。

いじめは起こらないことが第一です。しかし、万が一起こってしまっている場合は、いじめに直接関わっていない他の人(傍観者)の存在が大切と言われています。傍観者が心の中でたとえ「いじめられている人がかわいそう」と心を痛めていても、遠くから見ているだけでは被害者の目には加害者と同じ側の立場として映ってしまうものです。つらい思いをしている人にとって、寄り添ってくれる人の存在は何よりもありがたいものです。また「それ、いじめだよ。」と注意したり大人に相談したりすることができれば、いじめの深刻化を防ぐ可能性が高まります。とても勇気のいることですが、その行動が被害者はもちろんのこと加害者をも救うことにつながります。そして、多くの人がそのような気持ちを持つる環境の中ではいじめは起これにくくなります。

最もあってはならないことは、いじめがあっても本人が申し立てることができず、周りの人も助けてあげることなく、被害者の苦痛が放置されたりいじめが深刻化したりしてしまうことです。

また、最近よく見られる傾向に、他者の間違った行為や気に障った言動等をネットやSNSにアップしてしまう人がいますが、たとえ正義感からの行動と考えたとしても、多数の目にさらして社会的な制裁を求めるようなことは、いじめの加害と変わりません（個人情報の観点からも要注意です）。

ブルーリボン運動は終わりましたが、東国分中の生徒がこれからも「いじめをしない、させない、許さない学校」をつくってくれることを願い、今回の学校だよりを発行しました。